

フランシタン(francitan)への考察

——〈一つの言語〉の余白として——

佐 野 直 子

(0) 本稿の論点

極度に発達した文字社会である近代ヨーロッパにおいて、言語とは、書かれることを前提とした、「ひとつの(数えられる、他とは異なる)」「純粋な」存在である。

書かれることがなければその言語の存在は認知されえず、したがってその話者の権利や言語使用の制度の保障もできない。この、言語の(書き言葉をもとにした)あらゆる場面での十全な社会的機能の保障を、話者の人権として進めていこうとする意志は、近代ヨーロッパの言語観の特徴といえる。⁽¹⁾

一方で、日常のごくあたりまえの会話のなかでは、こ

純粹さや「他の言語」との境界線は持ち合わせていない。しかし、言語を対象とするいとなみ(言語学であれ、その保全運動であれ)は、書くことによって「一つの言語」という規範を成立させ、日常のことばの限雑さをそぎ落とそうとする意志として成立してきた。しかし現在、ことばの現実の混沌をあらためて見つめ直そうとする動きがある中で、〈一つの言語〉は、話しことばの混沌とどのように関わろうとしているのだろうか。

本論文では、「南フランスの少数言語オクシタン語(occitan)⁽²⁾とフランス語との混成形態」と定義される「フランシタン(francitan)⁽³⁾」に焦点をあてる。オクシタン語はその「言語領域」がほとんどフランス国内にあり、そのため常に北フランスの「オイル語(langue

diol)」と南フランスの「オック語 (langue doc)」の対比として言及されてきた。フランス語の存在は、オクシタン語にとって最初に参照される「外部」であるだけでなく、文法、語彙、さらには「一つの言語」の作り方そのものにおいても多大な影響を与えており、オクシタン語にとって内部化されているともいえる。しかし、その狭間で、オクシタン語、さらにはフランス語にとってもっとも根源的であるからこそ排除されてきた、「話しことばの混沌」があった。それはフランス語とオクシタン語の成立過程の節目ごとに「出現」し、注目され、そして忘れ去られてきた。近年改めて注目されている「フランシタン」の歴史を概観することで、へ一つの言語としてのオクシタン語の生成過程と、その「余白」としてとりまかれた日常の話しことばの関係について考察していきたい。

(1) 「フランシタン」の可視化

—話しことばの記述

Francitan (フランシタン) — フランス語とオクシタン語の混合形態が注目されるようになったのは、gasco-

nisme, provençalisme などという呼び名において、十八世紀後半から十九世紀前半にかけてである。十八世紀後半、特に都市部においては識字率はかなり上昇していた。言葉を書き留めるという欲望が大衆化するにつれ、知識人たちは、人々がいつも同じような間違いを犯すのに気がついた。⁽⁴⁾ その理由を探すのは難しくなかった。人々は、フランス語を書くに当たって、普段話しているその地方の俚言—パトワ (patois) を混ぜてしまうのである。そして、そのような間違いをする人々がフランス語を話そうとしても、もちろん同様の間違いを犯してしまう。

地元の知識人たちは、やはり書き言葉を通してそれらの間違いを正そうとした。一七六六年に「正しく話し、書きたい全ての人に、特にその教育が十分でない若者に便利な著作」として、⁽⁵⁾ “gasconismes corrigés” (図①) が出版された。この本は版を数回重ねる大ベストセラーとなり、その後南フランス各地で類似のマニユアル本が数多く出されるようになった。⁽⁶⁾ 形式はいろいろだが、彼らは典型的な「間違い」を系統的に集め、分析し、それを「正しいフランス語」の語彙、文法、統語法と対比さ

図① Desgrouaisの Les gasconismes corrigés (1819年版) 第1ページ



LES
GASCONISMES
CORRIGÉS.

À supprimer.

Bien des gens suppriment un *à* dans les occasions que voici.

I.

Gasconismes,

*corrigés.**

Nous manquâmes tom-
ber dans l'eau.

Nous manquâmes *à* tomber
dans l'eau.

Nous faillîmes nous y
méprendre.

Nous faillîmes *à* nous y
méprendre.

Notre curiosité faillit être
punie.

faillit *à* être punie.

On peut dire aussi : Nous manquâmes *de*, nous fail-
lîmes *de*, etc.

Il y a des momens bien critiques dans la vie : hier,
mon fils faillit *à* être assassiné ; avant-hier, un de mes

* On ne répétera plus le mot *corrigés*, la colonne à droite
marquera toujours les corrections.

A

せた教科書（語彙集・文法書）を執筆した。これは日常の「話しことば（パトワ）」を体系的に記述するという、今までにない試みであった。その一連の豊富な著作によって、私達は、この「言語私生児」がこの時期に始まり、広範に広まったのだ、と推測することができる。それはまた、南フランスにおけるフランス語への言語取り換え (language shift) に伴って生じる言語接触として説明される。⁽⁷⁾

しかし、特にこの時期にフランシタンが広く問題化され、矯正の対象になったことは、フランス語とオクシタン語という二つの言語がこの時期に初めて混じり合い始めたことを示すのではない。十六世紀、数々の勅令によってフランス語が公文書として南フランスに浸透した際、フランス語とオクシタン語の混成形態で書かれた文書が出現した時期があった。⁽⁹⁾ そもそも「フランス語」が厳密に成立するのは十七世紀以降、そこに含まれる下品さ、各地の様々な地方方言の痕跡を「フランス語でないもの || パトワ」としてそぎ落とすことによってである。⁽¹⁰⁾ また一方で十七世紀以来、一部の地元詩人や喜劇作家の書き留める南フランスの人々のことば（テキスト①）にはフ

ランス語の要素が多く認められてきた。⁽¹¹⁾ これらのテキストは、「フランシタン」が長期間にわたってある程度安定して南フランス社会に存在していたことを推測させる。十八世紀後半に始まったのは、フランシタンそれ自体ではなく、その「問題化」である。この時期に特有のことは、正しいフランス語を書くための媒介・手段としての話しことばが注目されたことであつた。⁽¹²⁾ はからずも書き言葉の中に出現し可視化された話しことばを、書き言葉によって正し、話しことばに再び浸透させようとする。その時階級によって分裂していた書き言葉と話しことばが、啓蒙主義と識字率の上昇を背景に交差した。

さらに、フランス革命は地方諸言語の存在を政治問題化した。各々の地方のパトワによる革命（または反革命）パンフレットがおびただしい量印刷され、⁽¹³⁾ また、全国各地のパトワの状況調査のためのアンケートが行われた。⁽¹⁴⁾ 「フランス国民」の平等な権利を保障するにあたって、フランス国内の非常に豊かなパトワという話しことばの存在をどう扱うべきかは、紆余曲折を経てジャコパンの民主主義が結論を出した。すなわち、言語の差は、全て平等であるはずのフランス国民において差異を生み

だすという理由で、革命政府は全てのフランス人が同じ言語を同じように話すことを求めたのである。パトワの存在それ自身が反革命的だと非難される事態すら起きている。⁽¹⁵⁾話しことは話者の理性のもとにおかれ、さらに「フランス国民」という集団の意志のもとにおかれることになった。

フランシタンの「問題化」は、話しことばの可視化が、「書くように話すべき」という意識と交差したとき、書き言葉に特有のイデオロギーであった「純粹性」が、話しことばにも適用されて起こったといえる。フランス語の「純粹」の規範意識が話しことばの世界に浸透するにつれ、「パトワ」という多様な話しことばの一部が、「間違えたフランス語」であると認識されるようになった。そしてそれを「書き言葉のようなフランス語」に正そう、正せる、という使命感は、思いがけなくもパトワに「形」を与える結果となった。

知識人たちはこれらの「間違い」を執筆していくにつれ、一般大衆のパトワは合理的に、少なくとも対比させているフランス語と対等な程度に合理的に記述できるということに気がついた。つまり、南フランスの人々の話

しことばが、「フランス語」というひとつの「純粹」な言語と、もう一つのそぎ落とされた「純粹」とが混じりあった結果の「雑種」であるときみなされるようになったのである。では「もう一つ」とは何であろうか。フランス語に対応するもう一つの「純粹」が、ここで初めて「再構成」されるようになった。

識字率の上昇に伴って文字を書く手段を手に入れた人々は、「間違えたフランス語」によって可視化された「もう一つの純粹」を、今度は意識的に書き留め始めた。オクシタン語の文献が、手記であれ印刷物であれ、急速に増え始めたのは、革命期から、特に十九世紀前半にかけてであり、それはまさにルネッサンスと呼ぶべき規模であった。⁽¹⁶⁾これらの文学活動は組織化されたものではなく、各人が各人の表記で自分の住む地域の言葉を書いていたが、それでも一八四〇年代には、南フランス全土で読まれる詩人も現われていた。⁽¹⁷⁾各地で「もう一つの純粹」が可視化されるにつれ、この言語が南フランスを覆う広範な地方に共通のものであるという認識が高まった。また一方で、“gasconismes corrigés”の著作が盛んに出版されていた時期と時を同じくして、中世のトゥルバ

ドゥールの言語が「再発見」され、パリの文壇をにぎわせていた。そして、その言語に非常に近いことばが今でも南フランスで話されているという主張がなされ、フランスにおけるロマンス語文献学研究の端緒となった。⁽¹⁸⁾

広範な地域に共通性のあり、歴史的に一貫性のある南フランスの「一つの言語」意識が結実しようとしていたが、それはその言語がいま、まさに失われつつあるという強烈な危機感に裏打ちされていた。言語の混合は言語の取り換えに追隨して起こるのではなく、むしろその逆である。現実の話しことばを「雑種」と意識化したとき、人々は見えたことのない「純粹な過去」をなつかしむようになる。間違ったフランス語を排除しようとする一連の教科書の中にも、地元のことばが失われようとする危機感が現われるようになった。⁽¹⁹⁾このとき初めて、言語の取り換えは「すでに起こってしまったこと」として人々が意識するようになった。

(2) 拒絶された「フランシタン」

——「二つの「純粹」のはざままで

十九世紀前半まで、各地で出版されていた“gasconi-

smes corrigés”タイプの著作の出版が、十九世紀後半には激減する。⁽²⁰⁾それはもはや gasconisme や provençalisme が問題でなくなるほど人々が正しいフランス語を読み、書き、話すことができるようになった証拠であろうか。そうではあるまい。フランシタンは現在も存在するのだから。また、文字が農民にまで普及し、話し言葉としてのフランス語が農村にまで浸透するようになるのは十九世紀後半以降である。むしろこれからこそ“gasconismes corrigés”の教科書が必要になるはずではないのだろうか。

メルル (Merle) は、一八四〇年を「オクシタン語の記述」の転換点としている。⁽²¹⁾この年、プロヴァンスの医者、オノラ (Honorat) による地理的・歴史的に極めて広範に網羅したオクシタン語の辞書の計画が発表された。辞書自体はそのとき出版されることはなかったが、その時すでにオクシタン語という「一つの言語」意識が成立していたことを推測させる。南フランスの各地で爆発的に記述されるようになったこのことばに対して、統一的な正書法の必要性が訴えられるようになっていた。そして一八五四年、プロヴァンス地方の若い七人の詩人

による、「プロヴァンス語」の復活・保全を訴える文学団体、フェリブリージュ (Felibrige) が結成される。

団員の一人であるミストラル (Mistral) の作品『ミレイユ』がバリで大成功をおさめ、文学語としてのプロヴァンス語は、広くフランス中に認知されることになった。十九世紀後半からのオクシタン語の記述は、へ一つの言語としての独立性や一体性を意識したものとなった。

その空間的・時間的一体性を維持しうる、すなわちトゥルバドールの伝統を受け継ぐにふさわしい正書法⁽²²⁾や語彙について、またそれを使用する文学作品の品位にいたるまで、多様な論争が繰り広げられた。それは、オクシタン語の純化・規範化運動と呼ぶべきものであった。

しかし一度そのような言語の規範意識がなりたてしまふと、人々の相変わらずの混成的、「雑種の」な言語活動はフランス語の観点からはもちろん、むしろオクシタン語の観点からはいっそう、あってはならないものとして黙殺されるようになった。言語は十全に記述できるという意識があれば、十全に記述しきれず、混沌としてゆらぎやすい現実の言語活動は、「言語」として許されないものと扱われざるをえなかった。少なくとも記述の

対象、または記述の手段としてはふさわしくないものであろう。一世代前には「混沌」を理性的に記述するべく gasconismes corrigés のような教科書を執筆していたであろう地元知識人達は、その関心をすでに「純粹なへ一つの言語」のオクシタン語の十全な記述、または「文学言語」にふさわしい形式や權威をもつ「プロヴァンス語」による文学活動へとうつしてしまっていた。純粹な形でのオクシタン語が農村でも消滅しつつある、という危機感⁽²³⁾は、むしろますます一般化した混沌たる言語活動への恐怖心と輕蔑を生んだ。オクシタン語への愛着が深ければ深いほど、フランス語で汚された日常のフランスシタンを嘆き、憂い、または意識的に無視するか排除しようとした。

ガストン・パリスの有名な言葉「二つのフランスはない。北フランス人と南フランス人を分かつかなる現実の境界もない。国土の端から端まで人々のことは、その多様な色合いがあらゆる場所で微妙なニュアンスでばかされている巨大な織物のように広がっている。」⁽²³⁾は、当時から大きな反発を呼んだ。そのような言語観を否定する意志として、へ一つの言語としてのオクシタン語

が文献学・比較言語学・言語地理学・共時言語学など、言語を扱う「科学」の対象として記述された。独自の語彙や正書法だけではなく、オクシタン語に固有の文法が記述され、北と南の境界線をはっきり示すフランスの言語地図作成が着手された。⁽²⁵⁾ 十九世紀後半から二十世紀前半の「言語学」の創世期にあって、オクシタン語という「一つの言語」の存在が、この学問分野を成立させることに大いに寄与したことは疑いない。しかし、比較に足るだけの文法の構築や、いまだ汚されていない（と仮定された）田舎の言語活動の記述などがオクシタン語研究の中心となり、特に都市部の「いま、ここ」の言語活動は黙殺された。十九世紀終わりから二十世紀初めにはフランス語の方言や俗語に対する研究が始まっていたにもかかわらず、オクシタン語の視点からは、そのような研究はほとんど行われなかった。⁽²⁶⁾ ガストン・パリスの言葉に含まれているある程度の現実の姿は、オクシタン語を研究し、擁護する側からは顧みられることはなかった。

一方で、一般化した「話しことば」書き言葉」としてのフランス語の規範において、実際的には十九世紀後半から普及したフランス語教育においては、現実の言語活

動が「純粋な個別言語」であろうと「雑種」であろうと、「正しいフランス語」でないことには変わりない。村ごとに異なり、フランス語と中途半端に混じりあい、極めて文脈限定的にしか用いることのできないパトワは、フランス語を学ぶための手段としてすらほとんど認められず、むしろ教室ではパトワを話すことを徹底的に禁じるシステムが発達した。フランシタンを話す生徒は、「どちらの言葉も満足に習得できない」として、学業失敗の典型例として扱われた。フランシタンは、一つの言語」の規範意識の普及と、「もう一つの言語」の生成過程の狭間の余白として、再び意識の外に沈んでいったのである。

(3) フランシタン再考——オクシタン語の

「排除しない余白」として

フランシタンの存在が再び注目されるようになったのは一九七〇年代、社会言語学的分析がオクシタン語に対してなされるようになってからである。第二次大戦後、「一つの言語」意識から導き出された「一言語一民族一国家」のテーゼをもとに、オクシタン語の「言語地図」

に基づいた領土が描かれ、その領土内の自治を求める政治運動(オクシタニスム運動)⁽²⁸⁾が起こったが、それは七十年代半ばにはその矛盾点を露呈しつつあった。南フランスの言語学者たちは、南フランスとは対照的に当時勢いをましつつあったカタルーニャの自治復権運動に注目し、カタルーニャの社会言語学者達との関係を深めた。

そこで注目されたのは、「ダイグロシア(Diglossia, 「社会的二言語併存」とも)」という分析概念である。オクシタニスム運動に共感する南フランスの社会言語学者は、カタルーニャ語復権の原動力ともなったカステイリャ語/カタルーニャ語の二言語の(非対称的な)コンフリクト分析を、フランス語/オクシタン語の状況にもあてはめようとした。⁽²⁹⁾

しかし、「ダイグロシア」状況を被支配言語⇨オクシタン語、支配言語⇨フランス語、という図式に当てはめて分析するに当たって、社会言語学者はオクシタン語そのものを話している人は「もはや」いないということ、「ダイグロシア(Di=『二つの』 glossia=『言語』)」は成立していない、少なくとも「二つの言語」の二極性の規範意識は確保されていないということを認めざるを

えなかった。⁽³⁰⁾ 日常の言語活動の中にあるのは、フランス語の規範意識を頂点とした、フランシタンのあらゆる度合の「連続体(continuum)」であり、あいかわらずのパトワを話しているという恥の感覚であった。

この時にはすでに「純粋な(一つの言語)」が虚構に過ぎないことを、オクシタン語ははっきりと示しつつあった。十九世紀からの〈一つの言語〉への試みによって、学問領域ではオクシタン語の存在を認めるようになってはいたが、⁽³¹⁾ カタルーニャとは対照的にオクシタニスム運動はむしろオクシタン語話者内部の政治的分裂を生んだ。〈一つの言語〉という準拠すべき標準語規範や、なにより「正しいオクシタン語を話すべき」という規範意識は話者の中に育たなかった。そして、かつて今もオクシタン語という言語を話していた人はいなかったのではないかと、という、〈一つの言語〉の不在を痛感して初めて、従来の「ラング/パロール」の二分法とラング偏重への疑問が提起され、「フランシタンの回帰」⁽³²⁾が促されるようになった。⁽³³⁾

「フランシタン」という名称が「名付けられえないものを名付ける」⁽³⁴⁾ために考案されたのはこの時期である。

それはこれらの連続体が「地方フランス語 (français régional)」 「南フランス訛 (accent du Midi)」 という言及のもとにフランス語の文脈に閉じ込めてしまうことを恐れ、オクシタン語の存在を日常言語活動の中に見い出そうとする呼称であった。⁽³⁵⁾ オクシタン語の存在は今も昔も、話しことばを「フランシタン」として意識化し、そのなかで「これはオクシタン語の要素である」と定義され、再構築されるものでしかない。オクシタン語はそれ自体としては(規範意識としてすら)存在しえず、フランシタンを媒介にしてしかありえない。そのことを、ようやくオクシタン語を一つの言語と認める立場の人々が直視するようになった。

「フランス語／フランス語でないもの(＝パトワ)」という区別以外を許さないフランスの言語意識に対して、オクシタン語が「一つの言語」であると主張することは重要である。フランス語の余白として排除された存在に焦点を当てることで、フランスの国民国家、共和国理念にとって当然とされてきた二項対立の文脈を相対化し、それがいかに強権的で暴力的であることを示すことができ

る。しかし、オクシタン語を、フランス語と対等に扱おうという欲望は、フランス語のもつ暴力性をそのままオクシタン語に与えてしまいかねない。

オクシタン語が「一つの言語」であるためには、南フランスにおける「フランス語でないもの」の中の「オクシタン語でないもの」、すなわち「フランシタン」が徹底的に否定されなければならなかった。その多層的、中間的な存在を認めてしまえば、「一つの言語」の主張が成り立たなくなるからである。したがって、フランシタンの文脈では、規範化されたオクシタン語は極めて強権的な、フランス語よりさらに強権的な存在になってしまう。「フランス語」と「フランス語でないもの」の二項対立であれば、日常の話しことばの自由な言語活動は「フランス語でないもの＝パトワ」のなかで保存される。むしろ人々はその文脈の中にとどまることを望むようになってでも不思議ではない。オクシタニスム政治運動の失敗は、「オクシタン語＝オクシタニー＝オクシタン民族」を構成しようという意志が、主人公であるはずの「民衆／民族」の、隈雑で混沌とした言語活動の否定になってしまったことも原因であろう。

オクシタン語は、フランス語という「一つの言語」の在り方をモデルにして、自分も「一つの言語」たろうとしたが、フランス語のような決定的な規範―否定する意志―を持つにはいたらなかった。現在、オクシタン語を擁護する人々は、フランス語の在り方とは異なる、非常に規範意識の緩い言語の在り方を追及し始めている。それは、地方の方言の尊重や表記法の分裂をも認知する姿勢⁽³⁶⁾だけではなく、フランシタンという「いま、ここ」の話しことばを見つめる視点としてのあり方である。フランシタンの文脈では、「一つの言語」としてのオクシタン語は、常に「自分たちの話しているものとは違う」と、ネガティブに参照される存在にすぎないが、オクシタン語の擁護者たちは、その多様な形の緩い全体としてのオクシタン語が存在する、という主張が広く認知されるよう努力することに留まるようになった。それは非常に弱々しく不安定な言語の在り方であるが、かつて強固な「一つの」規範を求めてきた時期よりも、むしろオクシタン語の存在自体は社会的に認知されつつある。

人々のフランス語への乗り換え(language shift)によるオクシタン語の衰退が叫ばれて久しいが、そのフラ

ンス語とは、その地方の「地域フランス語」、すなわちあらゆる形態のフランシタンに他ならない(テクスト②)。日常の話しことばであるフランシタンに対する興味は七十年代以降徐々に広まっている。社会言語学の重要な分析対象であるだけでなく、八十年代から徐々にカリキュラム内に導入された学校でのオクシタン語教育では、日常に使用されているフランシタンを積極的に評価して取り入れようとする動きもある⁽³⁷⁾。また、フランシタンを「標準フランス語」とも「規範化されたオクシタン語」とも異なる「クレオール」である、と主張する人も⁽³⁸⁾いる。語彙集の編纂も七十年代以降数々行われている⁽³⁹⁾。

しかし、いくらフランシタンとしての記述を精緻にしても、フランシタンの話者達はその記述の中に留まろうとする意志を持たないのだから、その規範化は困難であろう。語彙集に編纂された単語一つとってみても、その意味変化の速さは、話しことばの世界がいかに揺らぎやすく、不安定であるか、それでいて世代を越えて残り続け、豊かであるかを示している。いいかえれば、オクシタン語は、話しことばの多彩な表現の供給源の一つであり続けている。余白は減りもしなければ無くなりもしな

テキスト①

«Ramounet ou lou paisan agenés tournat de la guèrra», II, 2
(Agen, François de Cortète, Guyau, 1684)

RAMOUNET

Mon nom est l'Espéranso!

Y a-t-il d'un pastourèl à moi de comparanso?

J'èi benci plus de gens, murtri plus d'anemics
Que dans la fourmiguèro on ne boit de
fourmics

Témoun, à ce parti, quand dins la Mantoulino
Le sarjan Gripo-tout, foursant uno galino
N'eut jamais la regarde. Il ausit trac, trac, trac,
Et d'un coup de fusil, le boilà patatrac!

Je le prends ; je le porto en lieu d'asseguranço.

Et bien! sa me fit-il, moussur de l'Espéranço,

A bous toute la sarge et l'honneur du combat!

Lors, je pousse, je tourne où mulhou l'on se bat,

Romps, enforce, les chasse ainsi qu'à du
mainage

Et de ceux qui restaient j'en fesais coumpanage

De fesson que, de cent, il en fut estroupié

Ou morts cinq bint quatorze ; et le resto haut le
pié.

Tu ris! le faudrait boir et que tu l'assagissos!

FLORIMOUN

Ni me gausa grata damb mas unglas metissos!

Fa diable! E desempèi l'on t'apelo moussur?

RAMOULET

Je sais de Folrimoun que c'est un gaudisseur.

Mais soit!

FILIPO, *en la tastian la tesseto de soun gipou*,
Que bous coustèt?

RAMOUNET

Trois bins francs.

FLORIMOUN

Lou boun ome

L'a gagnat à la rafflo à quauque gentilhomme!

RAMOUNET

A la rafflo, mort tèsto! Oh! nou! Quanto per
moi

Qui tiro apuntemen au serbice du roi,

Lou mendre que je porto est d'escarlato roujo.

Gardy, P., 1997, *Histoire et anthologie de la
littérature occitane*, Tome II, p.108-109

テキスト②

«Erreur de Montage»

Il ramena tout un bataclan. Vous dire
qu'il zagoucha pas pour souder le
tulhau, pendre le peirol de l'aiga et sa
chadine, poser le siège, ça serait
mensonger. Il lhi arriba, en jurant à
n'en faire rougir la tonsure du curé
Mais voilà pas que la finotte sienne
lui fit un catéchisme du diaple:

-"Je suis pas countente, pour quoi
c'est pas coummode. Va voir le
marchand et demande-lui counseil!"

L'Hugues tourna à Bort.

-"Alors, ça marche, vos cabinets?",
demanda le vendeur.

-"Foutre, oui! Mais c'est la finotte
mienne qu'arrête pas de ronchonner..."

-"?"

-"Oui! Elle trouble bien que c'est
pratique, mais elle se plaint quand
même!"

-"Et pour de quoi?"

-"Elle me dit qu'en été, ça peut faire,
mais en hiver, le rebord de la cuvette
lui élargit les fesses, même que ça lui
coupe l'envidza de faire!"

-"J'ai saisi! Vous avez oublié de
monter une pièce!"

-"Non pas foutre!"

-"Praco, si! Je vous avait bien fourni
une lunette en bois..."

-"Une lunette? C'est vertad, je m'en
souviens. Mais moi, j'ai crijut que
c'était un présent de vostre part."

-"Non pas! C'était un élément de
l'ensemble."

-"Merda alors! Il me manque plus qu'à
déclouer de la parida du salon.
Foutraou que je suis. Créjio que c'était
un cadre pour faire joli, même que j'y
avait mis la foute de ma belle-mère!"

Il se dit que le vendeur attapa un rire
à n'en compasser partout. Quand on se
lance dans le bricolage, faut pas
oublièr de légir la mode d'emploi!

Mallouet, J. / Gauthier, C., 1993,
Petites histoires en franc-parler,
St Etienne, Action graphique, p 82-84

い。それを否定したり恐れることなく、「排除しない余白」としてむしろ放置するような形で認めるような言語の在り方の模索が、オクシタン語という言語において始まりつつある。

(1) 田中克彦, H・ハーマン『現代ヨーロッパの言語』, 岩波新書, 1985, p. 14-16 参照

(2) この言語の名称については拙論文「L'occitan-ce que UNE langue veut dire?」(日本ロマンス語学会三十周年記念国際シンポジウム「地域ロマンス語とロマンス言語学」論文集, Roma, Bulzoni, 一九九九年刊行予定) 参照。本論文では、「*l'occitan*」の名称としてオクシタン語を使用するが、「オイル語」の対比としての名称に「オック語」, また十九世紀には一般的だった文学語としての名称に「プロヴァンス語」を使用することもある。

(3) Couderc, Y., "Francitan", *Occitania passat e present* No. 3, 1974 参照。この用語は「フランス語とオクシタン語の混合形態」の中でも特に文法構造はフランス語で語彙と形態素にオクシタン語の痕跡が認められるような状態を指すことが多い(これらの混合の度合の分類とその名称については問題な⁴ Mazel, J., "Francitan et français d'oc. Problème de terminologie", in *Lengas* No. 7, 1980; Lafont, R., "Pour retrouver la diglossie", in *Lengas*

No. 15, 1984; Boyer, H., "Le (Francitan). Matériaux pour l'approche des représentations et fonctionnements sociolinguistiques d'un *interlecte*", in *Lengas* No. 23, 1988, p. 90 など参照)。しかし混合の度合を系統的に分類することは本論文の主旨にむしろ反する。筆者は「フランシタン」という表現をフランス語とオクシタン語の混合形態のあらゆる段階をも含めた全体の総称として使用する。(4) 十七世紀以来はなくなっていた「乱れた(地方の要素の混ざった)フランス語」の文書が、革命期に再び増加し始めた。Brun, A. *ibid.*, 1927, p. 152

(5) Desgrouais, *Les gasconismes corrigés. Ouvrage utile à toutes les personnes qui veulent parler et écrire correctement, et principalement aux jeunes gens, dont l'éducation n'est point formée*, Toulouse, 1766 (1768, 1792, 1801, 1812, 1814, 1819)

(6) これらの教科書のリストは Boyer, H., *Clés sociolinguistiques pour le "francitan"*, 1990, CRDP Montpellier 参照

(7) 「話言葉としてのフランス語の普及とこの言語私生活の出現の時期は一致している。」Brun, A. *La langue française en Provence de Louis XIV au Félibrige*, 1927, Edition de Marseille, p. 152

(8) Baris, M., *Langue d'oc contre langue d'oïl*, 1978, fédérop, p. 14-19

(9) Brun, A., *Le français en Marseille*, 1931, Marseille,

p. 9-10 などを参照

- (10) 一六九四年のアカデミー・フランセーズ編集の辞書で初めて「パトワ (patois)」が項目として記された。「ほとんど全ての地方で話されてる話れたことば……」¹⁾ 言語は直接でこの語をなすなら」²⁾と語られていた。

- (11) Gardy, P., *L'écriture occitane aux XVIe, XVIIe et XVIIIe siècle. Origine et développement d'un Théâtre occitan à Aix-en-Provence (1580-1730)*, Béziers, CIDO, 1986
- (12) Brunot, F., *Histoire de la langue française, des origines à 1900*, Tome VII, Paris, Armand Colin, 1926, p. 28
- (13) Boyer, H. et al., *Le texte occitan dans la période révolutionnaire 1788-1800*, 1989, Montpellier, S. F. A. I. E. O.
- (14) 有名なグロトマンのマンナーズについて de Certeau, M., Julia, D. et Revel, J., *Une politique de la langue-La révolution française et les patois*, Gallimard, 1975 参照

- (15) バレールの共和国歴二年兩月八日の演説より:「我々は政府、習慣、思想を革命した。言語も同じく革命しよう。連峰主義者と迷信は低地フルトン語を話す、亡命者と革命への憎悪はドイツ語を話す、反革命はイタリナ語を話す、狂信はバスク語を話す……」

- (16) Lafont, R. et Anatole, C., *Nouvelle histoire de la littérature occitane*, PUF, 1970, tome II, p. 513
- (17) Jasmin など。Lafont, R. et Anatole, C. *ibid.*, 1970, Tome II, p. 535

- (18) Raynouard, F., *Choix des poésies originales des Troubadours*, Paris, Didot, 1816-21, Tome I, p. XXV. Raynouard などの始めるロマンス語研究について「Lengas No. 42, 1997 参照」

- (19) de Gabrielli, C., *Manuel du provençal ou les provençalismes corrigés*, Aix Aubin, Marseille Camon et Masbert, 1836。これは「基本方針はフランス語の習得を助けることだが、死に類した言葉のオキナマンナージュ」(Merle, R., *ibid.*, 1990, p. 874)。

- (20) *Recueil du versions provençales pour l'enseignement du français*, Tome I-3, 1876-78, Avignon, Librairie Aubanel Frères; *Provençalismes corrigés par le provençal. Essais de Pédagogie Régionale III*, Editions du "Porto-aigo", Aix-en-Provence, 1941 などが出版されているが、いわゆる正しいプロヴァンス語を通して正しいフランス語を習得する、という視点に立っており、現実の間違ったフランス語から間違えを取り除く十九世紀前半までの教科書とは異なっている。

- (21) Merle, R., *L'écriture du provençal de 1775 à 1840*, 1990, CIDO Béziers

- (22) 特に正書法については、フェリブリージュの正書法ではプロヴァンス以外の地方では使用しない、フランス語の正書法に似すぎていて中世からの伝統とも断絶しているなどの理由で二十世紀に入ってから新しい正書法が考案され、正書法分裂の問題は現在も続いている。拙論文「『少

数言語』の新しい在り方—オクシタン語の場合」(ライブラリ相関社会科学シリーズ第4巻『言語・国家そして権力』新世社、1997) 参照

- (23) Paris, G., *Les parlers de France (lecture faite à la séance générale de clôture du Congrès des Sociétés Savantes)*, 1880, Paris, p. 8
- (24) Ronjat, J., *Grammaire Historique des Parlers Provençaux*, (1931-40) reprint Slatkine, Genève/Laffite, Marseille, 1980
- (25) Bergounioux, G (dir.), *Aux origines de la linguistique française*, Pocket Agora, 1994, p. 302
- (26) Bergounioux, G (dir.), *ibid.*, 1994, p. 295
- (27) 教育現場でインターネットを利用した新しい語彙を提言する書ではなかったが、少数派にすぎなかった。Weber, E., *Peasants into Frenchmen*, Stanford University Press, 1976, appendix; Chareau, J., "Les français régionaux", in Anioine, G. et Martin, R. (dir), *Histoire de la langue française* (1880-1914), CNRS-Editions, 1995, p. 342 参照
- (28) 16の運動について *Amitas: Mort et résurrection de monsieur occitanisme*, vol. 20 (1989), Edisud; Toulouse A. et al., *Le pays contre l'Etat: Luites occitanes*, Seuil, 1981 など参照
- (29) Boyer H., *Langues en conflit*, Harmattan, 1991; 中嶋茂雄「チャントロネーと南欧の言語運動」(宮島喬・梶田孝道編『統合と分化の中のヨーロッパ』有信堂、1991) など参照
- (30) 「オクシタニストにとって認めるのは辛いことだったとしても、オクシタン語におけるディグロシーは(もはや)ネグロビッド欲しう状況ではなかった。」Boyer, H., *ibid.*, 1990, p. 31
- (31) Bec, P., *La langue occitane*, Que sais-je? 1963, p. 116
- (32) "Lengas", in *Lengas No. 1*, 1977, p. 5
- (33) Gardy, P., "Le retour du francitan", in *Lengas No. 1*, 1977
- (34) Boyer, H., *ibid.*, 1988, p. 72
- (35) 「彼は、語彙ならやばいロマニエ語を話している」Boyer, H., *ibid.*, 1990, p. 88
- (36) 「主として表記法があるが、人々が自分の表記法を自由に選択し、また、他の人にそれを押し付けようとしなうのが、それらを同等に扱わなければならない。」(Deschamps, B., «Sian uno revisto d'enformacion 19 in Li Nouvello de Prouvènço No 56, 1997, p. 19) 16の雑誌で、F. ベルランの著者した表記法について書かれたこと。
- (37) Boyer, H., *ibid.*, 1990, p. 95
- (38) Auzias, J.-M., "Réflexions sociologiques sur le francitan", in *Lengas No. 11*, 1982, p. 49
- (39) Nouvel, A., *Le français parlé en Occitanie*, Editas Montpellier, 1978; Camps, C., *Dictionnaire du français régional du Languedoc*, Editions Bonneton, 1991 など。九十年代に入って各地方の様々な語彙集が盛んに出版され

るようになっていたが、これも「失われつつあるもの」という危機感の反映かもしれない。

(40) 筆者は一九九七年五月に、モンペリエ大学において、フランシタンの単語の意味変化についてのアンケートを行

った。その成果については別稿を準備中である。

一九九八年九月九日 受稿
一九九九年五月十日 受理
(一橋大学大学院博士課程)